

## ベルリンの壁崩壊から30年

西区・甲北支部 林 敏雄

西ドイツと東ドイツの境界線に構築された所謂“ベルリンの壁”が、平成元年11月9日に崩壊した時、偶々私は厚生省の瑞・英・独・仏4カ国約2週間の欧州病院視察団の1員としてヨーロッパにいた。

団長は国立病院の院長、副団長は臨床医から行政に転じ、英・独・仏語に堪能な厚生省高級幹部の方がなった。その他厚生省中堅幹部が数人に、国立病院の副院長4人が班長(私は仏国)、医長クラスが8人配属され、近畿ツーリストのベテラン添乗員1人を加えて、総勢20人程で出発した。

ドイツの港町ハンブルグに到着した時が丁度視察旅行の半分で、休暇のため1日自由行動が許され、どう過ごすかで賑やかになった。そこで2カ月前、崩壊したばかりの“ベルリンの壁”を見にいこうという4人組が一番早く決まった。A先生(熊本病院外科医長)、I先生(山口病院脳外科医長)に、X先生と私の4人である。早速添乗員さんをお願いして、ベルリンまでの飛行機を手配して貰った。

ベルリンに着くとA先生の従兄さんという方が待っておられた。彼はベルリン放送管弦楽団の一員で家族ぐるみでお住まいの家に案内され、温かい朝食をご馳走になってしまった後、従兄さんに車で“壁”まで案内していただいた。

現地に着くと既に大勢の観光客がきており、高さ4m、幅10数cmの壁の手の届く範囲は、ハンマーやツルハシで殆ど削り取られて醜い灰色の壁が露出していた。しかしまだ数人の“ウォール・ペッカー(壁きつつき)”と呼

ばれる男達が色の残った壁を探していた。前の空き地には婦人達が、色つきの壁のかけらを組み合わせて売っていた。私も記念に一組を5マルクで買った(写真1)。

そこからブランデンブルグ門に移動すると更に人は増え、門の脇には簡単な検問所が出来ていてドイツ人は簡単な検査で東西に出入りしていた。壁も低くなっており簡単な柵を登れば幅が1m超あるらしく、壁の上に立つことが出来るようだった。そして一人が登り始めると、後から何人も続いた。ビデオカメラをもってこられたI先生も登り、東西方面の写真を撮っておられた。すると突然パトカーが現れ、壁に登っている人は速やかに降りなさいと警告したら、慌てることもなく全員降りたらパトカーは立ち去った。私達はブランデンブルグの横で、従兄さんから記念写真を撮って貰った(写真2)。そしてベルリンの街の動物園があった方へ移動した。そこは賑やかで土産物店が並んでいた。そのレストランで昼食を済ませ、土産物屋で“壁”崩壊を



写真1 “ベルリンの壁”の色つきカケラの一組(5マルク)



写真2 ブランデンブルグ門の検問所前にて  
前列左からI先生、X先生、A先生、林

写したポスターを買って、廃墟と化した日本大使館のあった所に行った。それがベルリン日独センターとして生まれ変わるようで、既に菊の御紋章が輝いていたので感激した。戦時中父（陸軍大佐、暗号、情報担当）は、ベルリンの駐在武官室に暫く勤務していたが、間もなく陸軍少将に進級し、ハンガリー駐在武官となった。有効な一日の自由時間を過ごしてから空路ハンブルグに帰った。そこで記念に買った“壁”のポスターが無いのに気がついた。何処かに置き忘れたようだが、真に残念だった。

さてどんな病院を視察したかを紹介しておくのも大事かと思う。一番目はスウェーデン（瑞）で、ストックホルムのブディング病院はとてつもない大きい病院で、一応大学病院と聞いていたが、院内の受付の前を乗用車が通っているのには驚いた。救急棟にいくと広い廊下にはドクターやナースは走ることを禁じられ、代わりに2輪のスケーターが沢山置いてあり、職員はそれに乗って音も無く速やかに患者の元に到着するようになっていた。患者は直接病院を受診出来ずに、担当の家庭医で或る程度治療を受けてから、病院を紹介されるので、相当待たねばならないとこぼしていると聞いた。2番目は英国で家庭医訪問したが、大きい病院受診はスウェーデンと同

様の仕組みだった。それとテムズ川に面したナイチンゲールが勤務していた病院を見学したが、古い趣のある病院だった。3番目はドイツのハンブルグから少し南に下ったハノーヴァーの大学病院で、日本の病院とあまり変わらない感じであった。最後がフランスのパリで私が班長を務め、最初にパリ医師会の会長さんとお会いした。少年の頃、仏語の会話を含めて2年半勉強した時期があったが、医学部に行ってから勉強しなかったらすっかり忘れてしまった。会長さんとは簡単な挨拶程度しか話せなかった。パリではヨーロッパで600年前の一番古いといわれているオテルビュウ（仏HotelBieu）病院だった（仏語ではHは無音）。シテ島のノートルダム寺院の左前にあり、建物は古めかしいが中は近代的医療器械を備えた素晴らしい病院だった。

かくて東西ドイツの統一の気運が高まり、翌年遂に西ドイツ主導で連邦共和国が誕生した。やがて経済も発展し、同じ敗戦国の日本と並んで、豊かな国になっていった。

私は1995年9月の統一後5年目に、家内同伴で再度ドイツを訪問することが出来た。早速“壁”のあったブランデンブルグ門に行ってみると、すっかり様変わりしているのに驚いた。“壁”は完全に取り払われており、ウンターデン・リンデン大通りを車がスイスイと走っていた。旧東ベルリン側の路上には、露店が沢山出ており、ロシア人がマトリョーシカ人形等を売っていた（写真3, 4, 5, 6）。“壁”はかなり離れた所に20mほど記念のために残っていた。その後ベルリン近郊のポツダムで、戦勝国が戦後処理を検討した部屋を見学した。

東西ドイツ統一後、30年も経てば色々問題も出てきているようだ。現在東ドイツ出身のメルケルが首相を務めているが、東ドイツ出



写真3 ブランデンブルグ門 元東ドイツ側より

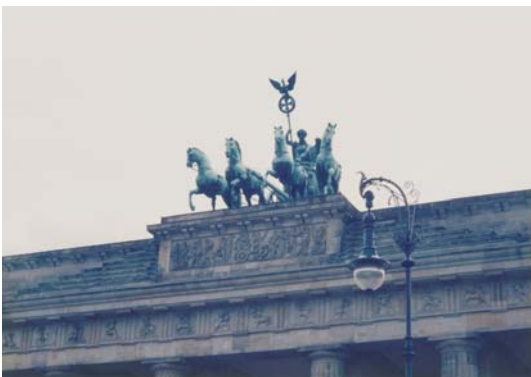


写真4 屋上の騎馬像

身者は給料が西側より15%も低いという。それに難民をかなり引き受けているので、東ドイツ出身者は東ドイツ時代がまだ良かったと不満が多いという。英国はすでに欧州連合離脱を表明しているし、統一通貨ユーロにも参加していない。

ドイツの自由化は近隣諸国にも大きな影響を与え、ハンガリー、チェコ、ルーマニア等多数の国が自由化した。更にソ連にも影響を与え、ゴルバチョフは1985年にソ連邦共産党書記長に就任したが、禿頭部に大きな赤あざが有り、ニコニコした顔が印象的だ。ペレストロイカ（改革）とグラスノスチ（情報公開）を唱え、民主化へ移行を考えたらしい。

1989年12月2日から3日に地中海のマルタで、ゴルバチョフとアメリカのブッシュ（父）大



写真5 元東ドイツ側空き地の露店



写真6 マトリョーシカ人形を売るロシア人

統領が会談して、東西冷戦の終結を宣言した。これでゴルバチョフは1990年ノーベル賞を授与された。

しかし民主化は中々進まず、エリツィンは1991年6月にソ連邦を離脱して、ロシア共和国大統領に就任した。そしてウクライナ、ベラルーシと共に、独立国家共同体の樹立を宣言したので、ソ連邦は遂に崩壊した。

現在アジアでは南北統一が残っているが、北朝鮮の金委員長、韓国の文大統領、アメリカに日本の4つ巴で、統一がいつ実現するのか混沌とした状態に留まっている。